

「帯」がのこされていた筈である。「樹帯」の中は昔の歩道より歩き良い。「樹帯」下りて、さて帰ろうと思つた時、早朝のこと意外な人物が上手の方から現れて来た、何者だろう。この雨の中、この意外な人物。「須崎さんですか。」「はい。」

我が名呼ぶ異人現れ野分跡

次に、「正敏さんですか？」重ねての声にさては探しに来た人だと直観した。「見つかったぞう。」と大きな声に近くまで来ていた人達が何人も来て私を囲んだ。無意識のうちに私は坐り込んでしまった。恥ずかしさや申訳なさに涙も出ない。それでも夜から吸ってない煙草の無心をする「だれか煙草持っていますか。」早速出してくれた煙草の味。持つ手も震いがちである。一本を吸い終ると目がくらくらする今度はジュースだパンだと手に持ち切れない。尾嶺で一夜だから一滴の水も口にしない。ジュースの味は格別である。それでいて吾が身の惨めさ筆舌で現せない。着ている合羽を脱いで、「風が通さないので温くなる。」と着せてくれたのは、小山内政栄さんでかつて同じ釜の飯を食べた山の仲間である。いろいろ皆さんの気遣いがありがたく身に泌みる。私は皆さんみたい早くは歩けないだろうから杖がほしいと云ったら早速杖を作ってくれた。

「さあ帰ろう」と帰路に着く。何んとしたことだ、一夜本拠地にして歩いては帰り、にぎり飯を食べたり休んでいた処からすぐ道が開けていたのだ。ブルドーザーで地ならした土で道を少し塞いでいただけのことだ。

帰りは下り坂が多いので案外楽に歩けた。それでも肩を借そうか、腕を借そうかと気づかってくれた。皆さん思っているより私は疲れていな

いし空腹でもない、杖を持っているし地下足袋はスパイク付きだ。雨あとの道で苦にならない。

鹿の子の車道に出ると、営林署、警察署、消防署、消防団、地元の人達、かくも大がかりな捜索隊に驚きのほかはない。目、目、視線は私に集中する。穴があれば入りたいとはこんな時のことだ。

後で聞いたことだが捜索隊は三ツに分れその一隊は高橋沢の方に、今重治さんがその一隊に加わって行ったそうで、彼は私の通る舞茸木もコースも大方知っている人である。ご苦労おかけしたものである。

救急車も来る、乗れとのこと身をまかせることにし、ついに救急車の車中の人となる。

金木病院で看護婦さんが、「診察室まで歩けますか」と、私は一人で診察室まで、待っていた先生は、私のかかりつけの先生で驚かれた様子でした。点滴二時間、家族、親戚の人の心配をよそにひと眠りもする。

家に帰ると町内の皆さんが炊出しに集まってくれたのだ。友人、親戚、私の身を気づかって集まってくれた人等ではないである。私の不用意な山歩きがこんなにも大きな波紋を広げたものと今更ながらである。

何んと人騒せな、「木から落ちた猿ではある」それにしても、各関係機関の方々の温情に感謝しながらも、私は一生かかってもお返しのない借りを作ってしまった今、只ひたすら「平身低頭」あるのみである。

○飯喰う野猿となりて夜の寒さ ○疲れない眠らぬ鉄則夜長越す

○迷路から外れて土肌冷まじや (遠く人声らしきを感じる)早朝

○煙草火も絶たれ手探り闇夜長 ○人声か耳そば立てて消す野分け

(一九九五・一〇・一三)

鳴海家の由来

鳴海 勲

元和(二六一五) 嘉瀬に承暦(一〇七七)ー(一五五八)の年間に安倍一族の築かれたゆかりの嘉瀬八幡館があり夷族の住みたる土地で飯詰高寛永(二六二四) 楯城の配下であった。

正保(二六四四) 夷族は機敏にて戦が上手津軽為信が数年攻めたるも夷族が馳せ参じるのでなかなか落城させる事が出来なかった。そこで、夷族慶安(二六四八) を攻めるには飯詰高楯城の下を通らなければならぬので遠い方の川を通り山越えして小田川林道を通り天正十五年九月先づ帰承鷹(二六五二) 来地館、加勢館の西館、東館攻め落とし八重、佐介主従皆討死し続いて三浦氏、浜館氏も城枕に放炎して果てたり(老若男女一人残らず討ち殺したり)茲に飯詰高楯城の命脈絶たれたり

寛文(二六六一) 鳴海先祖は名古屋の成海の郷に住み豊臣家の家臣であった。その故に大阪夏の陣で豊臣家が亡ぼさたので身の危険を感じて兄弟延寶(二六七二) 二人が東日流へ、一人は能代へ一人は嘉瀬へ逃れたのである。(天和二年頃)

天和(二六八一) 貞亨(二六八八) 元禄三年八月田舎庄金木組嘉瀬村百姓持高反別帳 百姓善右衛門 作人八十郎

田畑都合 四町一反二十一歩 年貢米料領収書

寶永(二七〇四) 寶永五年十二月十九日 徹寒善翁居士 寶永十月二十三日 長忠榮松大姉 寶永七年八月四日 聊道添圓居士

正徳(二七一)

享保(二七二六) 享保二年十一月二十日 寒山梅壽居士 享保十六年十二月十八日 妙雲寂道大姉 享保二十一年三月二十八日 智白道善居士

元文(一七三六) 鳴海家の人はあまりにおとなし過ぎるので村人からはいくちなすと見られ奴踊りの歌にもある毎く「稲妻いなづまびかびか、雷かみなりごろろ
寛永(一七四一) いぐち無し親父、蕎麦そば株くわさあきた来や、千両箱拾った」とうたいはやされたのである。
延享(一七四四) 今度生まれた後継ぎには熊次郎と言う猛しい名前をつけたが猛しくなかった。金木から荒らしに来るので仲が悪く、嘉瀬の人が
延享(一七四四) 金木に行くと叩かれる金木の人が嘉瀬に来ると叩くと言う仲が悪いのでそれを歌ったのが、「嘉瀬と金木の間の川こ小石流れて
寛延(一七四八) 木の葉が沈む」と唄い継がれてきたものである。奴達は館を守って帰へりには、「嘉瀬と金木の間の川こ、小石流れて木の葉が
沈む」唄いながら帰って来たそうだとすると主人が奥から出て来て今伺候と言って奴達を慰めたそうです。

寶曆(一七五一) 寶曆五年三月二日永傳院春清光居士熊次郎六十五歳 寶曆十年八月朔日 永贊院全相妙身大姉
善九郎より善六(彦一)善七(務)善八(力)分家 田畑一町一反三畝二十歩 作人 八十郎
明和(一七六四) 寶曆八年八月金木組嘉瀬村田畑高反別帳 田畑一町二反一畝四十歩 作人 善右エ門
安永(一七七二) 安永九年六月二十四日天下泰平奉納大乘妙日本廻 為施二世太平泰樂日月清明 鳴海氏
安永九年八月朔日 眞勝院耳節智性居士 文化四年一月十三日 眞榮院春山妙性大姉

天明(一七八一) 善九郎 六十四歳 妻八十一歳
寛政(一七八九) 寛元年四月吉日 上方道中 鳴海善エ門
享和(一八〇一) 寛政三年八月 特抱高反別張 七町六畝一二歩 百姓善エ門
文化(一八〇四) 文化九年二月五日 慈慧院壽岳導榮居士 六十歳 天歩八年十月十九日 慈麗院壽寶榮親大姉八十一歳
文政(一八一八) 文政二年五月七日 高野山遍照尊院にお参り、鳴海善エ門子息善吉請證文之事
文政九年年貢無調達付家財けつ処被仰付、取払節棟木箱一個有之右之箱之内御証文卷通有り、此度へき地へ被渡候為、養生粟七
斗借用致、若婦国於無之時將軍家約束頂戴処者也
文治四年四月一日 伊豫守義判 武蔵坊弁慶 亀井六郎祐重(以下省略) 浅田村惣兵衛にある写し
天保(一八三〇) 天保九年八月 上方かけるに行つた時の御寺証文有り

「昔馬を川に水浴びに乗って行つたら帰りに馬の尻尾にぶら下がってきた河童納屋の内にはいるや否や、あひぎつ(馬に食べさせるに飼い草を入れおくもの)破つて隠れた。そこであひぎつを壊して捕らいたら今度嘉瀬の子ども達を捕らないから勘弁してくれとお願ひしたので許して川に放してやったと言う。」この事は大正時代によしの神様が貴方内に河童神様が授かっているから怪我した人を揉んでやると治る。と言つた。

会員名簿

顧問	外崎 三千男
会長	木村 治利
副会長	沢田 政孝
兼會計	山中 正津
編集局長	山中 正津
会員	小山内 嘉一郎
	須崎 正敏
	山中 長三郎
	沢田 薫
	秋元 惣之進
	秋元 清逸
	木立 久二
	木下 清一
	原田 万治

II あとがき II

少年は夢(未来)を語り、老人は昔(過去)を語る。
五十年前、その時私は特別企画には全員の稿(記録)が欲しかった。現会員の誰にも五十年前はあつたのだから。各人それぞれの思い出話とその時代の世相を記録できた筈だ。
次に、もう死語になつてもよいと思ひたい戦争中の用語をいくつか記して、あとがきの代りとしたい。
○大詔奉戴日(たいしょうほうたいび) ○赤紙(あかがみ)召集令状のこと ○千人針・千人力(せんになんばり・せんにんぢから) ○慰問袋(いもんぶくろ) ○軍事教練(ぐんじきょうれん) ○竹鎗訓練(たけやりくんれん) ○B29(米軍陸軍航空隊の重爆撃機) ○警戒警報(けいかいけいほう) ○空襲警報(くうしゅうけいほう) ○燈火管制(とうかかんせい) ○焼夷弾(しょういだん) ○防空壕(ぼうくうごう) ○防空頭巾(ぼうくうずきん) ○絨毯爆撃(じゅうたんぱくげき) ○疎開(そかい) ○隣組(となりぐみ) ○徴用(ちようよう) ○女子挺身隊(じょしていしんたい) ○大政翼賛会(たせいよくさんかい) ○特高(とくこう)特別高等警察 ○非国民(ひこくみん) ○国民学校(こくみんがっこう) ○奉安殿(ほうあんでん) ○代用食(だいようしょく) 配給制(はいきゅうせい) ○愛国婦人会(あいこくふじんかい) ○国防婦人会(こくぼうふじんかい) ○玉碎(ぎよくさい) ○英霊(えいれい) ○復員(ふくいん)
まだまだあるが、再び使いたくない言葉を三十語ほど並べてみた。

II 表紙解説 II

今回は、ご覧のとおり第一集から第十集までの表紙絵をずらり並べたもので、解説することもないだろうが、各集の表紙絵の写真撮影者を紹介して解説の代りとする。

第一集	「人丸の神石」	撮影者・山中正津
第二集	「嘉瀬奴踊り発祥地の碑」	木下清一
第三集	「桃地蔵」	木村治利
第四集	「嘉瀬妙光庵寺宝・地獄絵」	木下清一
第五集	「嘉瀬八幡宮」	山中正津
第六集	「三縞ごぎん」	木村治利
第七集	「津軽凧絵」	山中正津
第八集	「嘉瀬奴踊りの歌詞・タタラビ花」	山中正津
第九集	「お城山の空壕跡と柵」	山中正津
第十集	「清久溜池の白鳥」	木村治利

昭和五十二年四月、嘉瀬ふるさとを探る会の発足から四年目にしてはじめて記録誌「かたりべ」が発行された。会の第一回の形に現われた事業は「人丸の神石」を嘉瀬八幡宮境内への遷座でした。それで、第一集の表紙には「人丸の神石」ということで第一回の編集会議で決めた。第二集から第十集までの表紙絵の決定は、いつも最後の編集会議で決めるようになった。

— 山中 —

かたりべ第十一集

発行 平成八年七月
発行所

(電話)
発行者 木村治利
編集人 山中正津
印刷所 朝日印刷

五所川原市一ツ谷
(電話三四一三三一六)



伊藤忠吉記念図書館



1090003802